
「今日」という日 - Re

安藤 靖紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「今日」という日 ― Re

【Nコード】

N8446U

【作者名】

安藤 靖紀

【あらすじ】

僕は「今日」ここにいる。「今日」という日、ここにいる。くく精神的な古傷を抱える「僕」は焼肉屋にやってきた。「今日」来ることに意味があった。「今日」ここに来ることに意味があった。「僕」にとっての「今日」とは……？ ※自身のブログに載せたものの転載です。

1話

周囲の喧騒というオーケストラのBGMの中、僕は焼肉屋で肉を焼いている。

僕は一人だった。

周りを見渡せば、家族連れがいて、カップルがいて、仲間達で来ている若者がいた。

彼ら彼女らはどれも楽しそうに話しながら、また笑い合いながら肉を焼いていた。

その世界の中で僕は一人だった。

家族が作り出す世界、カップルが作り出す世界、仲間たちで作り出す世界——そのどの世界にも入れない独りの世界。

僕は真正銘、まぎれもなく一人だった。

僕は少し、周りの人たちが作り出している世界を眺めていた。

眺めたところで、何か変わるわけでもなく、何をどうすることもできないのだけど、眺めていたかった。

そうして眺めると、自分が一人であることをとても強く実感した。実感、させられた。

それぞれのテーブルから肉の焼ける音が聞こえる。

「ジュー」。

言葉にすればただその一言だけど、その音の中には人々を魅了する何かが秘められているな、と僕は思った。

食欲という大きなウェイトを占める欲求を限りなく逆撫でる音。

きっとそれは太古からの人間的欲求なんだろうな。

原始人だった頃からの名残——そう言えなくもないけど、ちょっと言い過ぎかな。

でも、その音をよく聞いていると、肉の焼ける音の一つ一つに微妙な違いがある。

これもまた、個性なんだろうな。

人間にも個性があるんだ、牛や豚や鶏にだって個性があるでしょう。それは肉になっても変わらない。

人間の一人一人に個性がある。

牛の一匹一匹にも個性がある。

なんら変わらない、

僕ら人間には一人として同じ人間なんていない。

だったら肉でも同じだ。

人間でも、牛でも、豚でも、何でも、同じ個性を持っているものなんていないのだから。

そしてそれら全ての生命がそれぞれ違う過去を歩き、違う現在を生き、そして違う未来へと歩いていく。

世界とはそういうものだ。

だからある一つを失ってしまったら、もう二度と取り戻せない。

一つは、人間ならば「一人」となり、牛や豚なら「一匹」となる。

どんなに愛しているようにも、どんなにかけがえない相手だと思っていたとしても、失ってしまったらもう二度と取り戻せない。

どんなに抗ったところで、その真理には逆らえない。

失っては……か。

僕はそう考えて、また魂のない抜け殻になるんじゃないかと恐怖を感じた。

その状態はまさに感情や思考のない人形のような状態と表現して間違いなかった。

人の形をした、人間味がない生き物。

でも、前みたいにそうはならなかった。

僕もちよつとは前に進めたんだな、と実感した。

そうやって振り返る中で、自然と「今日」まで歩いてきた日々のことを考えた。

でも、考えて、思い出したら気持ちがザワザワしてきた。

まるで威嚇をする犬の毛のように、僕の心の中の気持ちを司っている部分が逆立った。

僕の心の中のその犬は、何かに怯え、威嚇しながら吠えている。

何をそんなに必死になって吠えるんだい？

——怖いんだ。

目の前にあるものが。

考えてしまうことが。

思い出してしまうことが。

そうして、また戻ってしまうことが。

その恐怖に怯え、僕の心の中の犬は威嚇し、吠え続ける。

でも、先ほどと同じように「今日」まで歩いてきた日々のことを考えた。

僕は「今日」ここにいる。

「今日」ここにいられてる。

だから、大丈夫だ。

大丈夫だから。

僕は吠え続ける犬を抱き抱え、何度も何度も言い聞かせた。

僕はトングを使って皿に盛られた肉を網の上に置き、同じように置いた肉を裏返した。

そうするとやる事がなくなり、ご飯やサラダを食べた。

そしてトングを持ち、また肉をひっくり返す。

その連続だった。

その行動の中に、思考も、意思も、感情も必要なかった。

だから僕は機械的に肉の様子を見、時に裏返し、時に何もしないようにしてみた。

そうしていくと、肉が

「もう少しで黒くなるぞ」

というメッセージを伝えてきた。

僕は焼けた肉をタレが注がれている小皿に載せた。

「そういえば、あの人も肉を焼いたらよく焦がしていたな」

僕はそうボンヤリと考えた。

やはり、僕にはまだ無心でいることはできなかった。

また気持ちがザワザワとした。

僕の心の中の犬はまた毛を逆立て始めた。

さっきと同じように僕は何度も言い聞かせる。

「大丈夫、何も怖くなんかない。大丈夫」

そうすると、落ち着いた。

僕が「今日」ここににいるということは、その犬の飼い方がわかったということだ。

心がザワつかないようにできた。

人形のようになることもない。

僕は生きている。

今この時を生きている。

僕は「今日」という日を生きている。

2話

もう少しで頼んだ皿が空になりそうな時、僕はトイレに立った。

皿を空にしなかったのは一人で来ているからだ。

さすがに全部空にしてトイレに行くのも変な誤解を招きそうで嫌だった。

貴重品だけを身に着け、トイレの看板を探した。

右に顔を上げたところにトイレの看板が見え、僕はその看板を全面的に信じてトイレへと向かった。

トイレに向かうと、ドアノブのところにあるマークが赤色になっていた。

不運なことに、誰か先客がいたみたいだ。

僕は自分の席に引き返すことにした。

一步戻ったところで、ドアの方から「ガチャガチャ」という音がした。

先客が出てくるんだろうと思って僕はまた身体を転回させ、ドアを見ると、先ほどのマークが赤色から青色に変わった。

そしてドアが開き、中から20代後半くらいの女の人が出てきた。

後ろで一つに束ねた髪が彼女を幼く映した。

店内からトイレへと続く道は広くなく、大の大人二人が並んで歩くのは難しかったから僕はただでさえ大きな体を壁側に寄せた。

そこまでして、僕はこんなところに立って待っているんじゃないかって、と後悔した。

彼女からすれば、僕のような男が壁に寄っているとは言っても迷惑だろうと想像することは容易だった。

でも、ここまでやってしまっただけはもう後戻りできないので、この場にいることこそが最善の策だ、と自分に三回ほど言い聞かせた。

「すみません」と僕は言った。

すると、彼女も「すみません」と言って、小さな体を精一杯僕とは反対側の壁へ寄せた。

その完全に通り過ぎた時、僕は何かを感じた。

振り返ってみると、彼女は僕のことをじっと見ていて目があった。少し疑問に思ったけれど、きっと彼女は僕のことを無神経な男だ、と思っているのだろうと考え、身体を元の状態に戻しトイレのドアノブを回して僕はトイレの中へと入った。

その中で、僕は一連の失礼な行為を思い出し、後悔の念を強くした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8446u/>

「今日」という日 - Re

2011年10月9日10時18分発行